

「倫理」における日本思想の扱い～その普遍性を求めて～

東京都立青梅東高校 本間恒男

1. 序

現行の学習指導要領では日本思想の扱いが（1）の中に移り、源流思想のすぐあとに扱う順番になっている。以前の旧指導要領との内容的な差異というものは全体を見るとあまり感じさせないと私は考えているが、この順序の入れ替えは大きな相違点といえるのではないだろうか。とりもなおさずそれは日本思想の重視ということがいえると思う。順序というのは重要なもので（私自身も経験があるのだが）、倫理の授業で、青年期、源流思想、西洋思想と順番に学習活動を行っている、日本思想にくるあたりで時間切れになる、はしょってしまうということがしばしばあるのではないだろうか。その意味でこの改訂の意味は大きいと思うのであるが、その割に日本思想に関する「高等学校倫理」の実践や研究などの報告の少なさは気になるところである。その意味で、一石を投じるというほどの立派なことはいえないが、ここに小論をおこす次第である。

2. 学習指導要領について

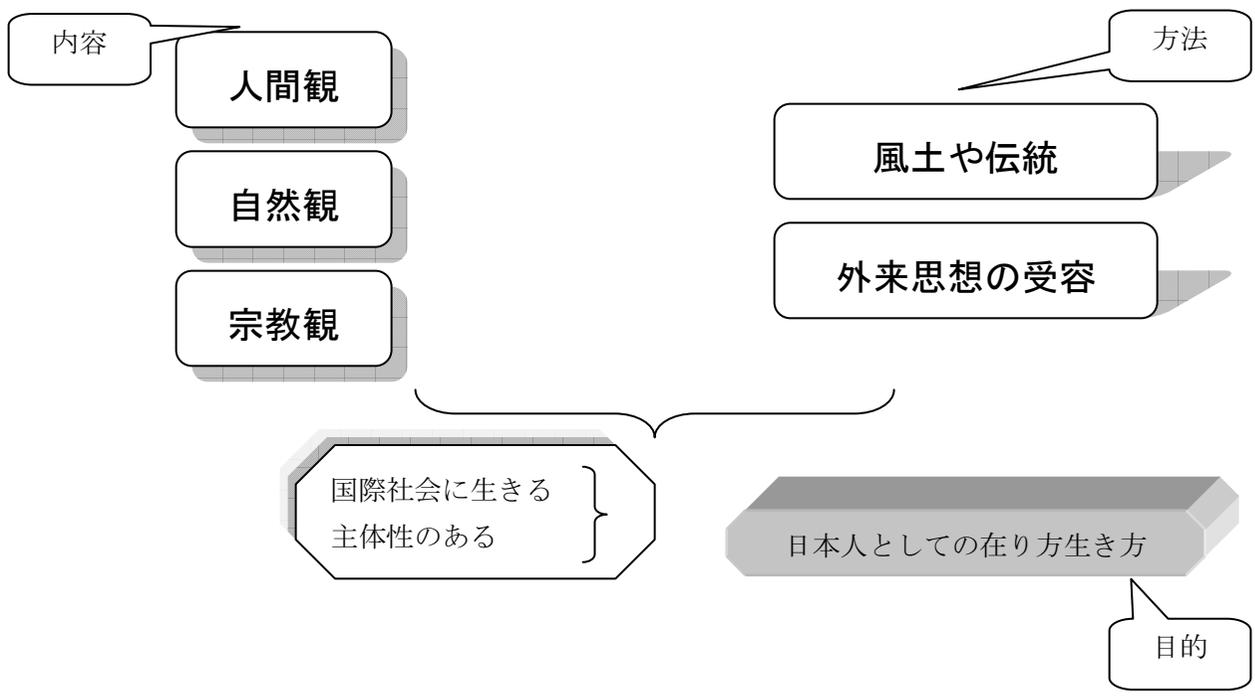
まず、現行の学習指導要領の日本思想の部分をここに掲げ、図示してみよう。

学習指導要領

（1） 青年期の課題と人間としての在り方生き方

ウ 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人にみられる人間観、自然観、宗教観などの特質について、我が国の風土や伝統、外来思想の受容に触れながら、自己とのかかわりにおいて理解させ、国際社会に生きる主体性のある日本人としての在り方生き方について自覚を深めさせる。



以上のような形に整理できると思う。日本人、あるいは日本の伝統的な人間観、自然観、宗教観といった内容を、日本の風土や伝統、外来思想の受容といった視点・特質から学習させ、最終的には主体的な日本人の在り方生き方への自覚へと導くといったものである。ここで気になるのは学習指導要領が大綱的基準とはいえ（やむを得ないことではあるが）、具体的な学習指導の内容、方法を示していないことである。これが日本思想の扱いを困難にしている点でもなかろうか。

3. 日本思想を扱う困難さについて

日本思想を倫理の授業で扱う際に、困難を感じるのは私だけではないだろう。結論から言えば、思想史が成り立ちにくいことから筋を追って系統立った授業を行うことがやりにくい、いや、できないからといえるだろう。つまり、授業ではわたしもけいけんがあるのだが、思想の羅列、思想家の羅列に終わってしまう傾向があるのではないか。その原因をうまく説明しているのが『日本の思想』（岩波新書）を著した丸山真男の指摘である。以下に著書からの引用をする。

「日本思想史の包括的な研究がなぜ貧弱なのか」

「ところが日本では、たとえば儒学史とか仏教史だとか言う研究の伝統はあるが、時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿るような研究は甚だまずしく、少くも伝統化していない。」

「…日本思想史の包括的研究が日本史いな日本文化史の研究にくらべてさえ、いちじるしく貧弱であるという、まさにそのことに日本の「思想」が歴史的に占めて来た地位とあり方が象徴されているように思われる。」

このように、丸山真男は日本思想史自体がほとんど成り立っていないことを指摘する。思想史が成り立っていない以上、思想を扱えば羅列に終わってしまうのは当然であろう。思想の一つ一つは光っているものかもしれないが、授業でそれを羅列するのは生徒にとっても教える側にとっても退屈なものにならざるを得ない。

「日本における思想的座標軸の欠如」

「…あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互関連性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で—否定を通じてでも—自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当る思想的伝統はわが国には形成されなかった、ということだ。」(傍点原典)

「思想が伝統として蓄積されないということと「伝統」思想のズルズルべったりの無関連な潜入とは実は同じことの両面にすぎない。」

さらに、重要な指摘であるが、日本の思想には中核、座標軸、筋となるもの、基底、こういったものがないということである。そこで有名なササラ文化とタコツボ文化という西洋と日本の比較がいわれるのである。次にそれをまとめてみた。

ササラ文化……西洋…基底に共通した伝統的カルチュアのある社会

ギリシア—中世—ルネッサンスと長い共通の文化的伝統が根にあって末端がたくさんに分化している

タコツボ文化…日本…専門的に分化した知識集団・イデオロギー集団がそれぞれ閉鎖的なタコ壺をなし、仲間言葉をしゃべって「共通の広場」が容易に形成されない社会

精神的雑居～異質的な思想が本当に「交」わずただ空間的に同時存在している。

ここで、タコツボ文化といわれる日本の文化と思想は次のような意味を持つと思われる。

- ① 閉鎖性～他との連関がとぎれている
- ② 雑居～関連なく並んでいる

中核、座標軸、基底なるものがないがゆえに、日本の思想は閉鎖性と雑居性をもつことになってしまうのである。これは日本思想を決しておとしめるものではなく、そういう性格を持つということにすぎないが、しかし、日本思想を扱う困難さをうみだしているといえるだろう。

4. 西洋における「基底」とは

それでは逆に西洋思想における中核、座標軸、基底なるものは何であろうか。すぐに思い浮かぶのは、キリスト教思想であろうが、ソクラテス以前の哲学からはじまる西洋思想ではもう少し幅を広げて考えてもよかろう。もしそれを一言で言うことが許されるのであればそれは「ロゴス」（理性、言葉、神）ということではないか。例えば…

- ギリシア思想では自然哲学がロゴスの追求を始め、プラトンの対話編ではソクラテスの活躍、プラトンの思想がロゴスを重視した。
- キリスト教思想では「はじめにロゴスありき」（ヨハネ福音書）と、聖書では語られ、イエスとキリスト教思想において、神という名のロゴスが支配する。
- 理性の系譜で考えれば、デカルトーカントーヘーゲルと理性（ロゴス）をいかに使うか探究される。現代になればレヴィ＝ストロース、フーコーなどは西洋中心の理性的思考、合理的思考を疑い、ハバーマスは対話的理性という名で、理性に再び信頼をおこうとする。
- 神との対峙という点では、キルケゴール、ニーチェ、ヤスパース、サルトルらが、神への信頼や神への徹底的批判において、自らの実存をかけ思想を展開する。

つまり、西洋思想の授業においては「ロゴス」の展開あるいは反「ロゴス」という物語の中で授業を構成することができるのである。

5. 基準なき日本思想

西洋のロゴスにあたる、中核、座標軸、基底がない日本思想は、結果として思想の羅列に終始してしまう授業になり、日本思想を扱う困難さを作り出す。例えば仏教思想を授業で取り上げるにしても、せいぜい「外来思想の受容」という物語くらいしか作れないのである。

そこで私たちにできることは、ロゴスにあたるような「基準」をつくりだし、日本思想の「物語」をつづっていくか、あるいは流れや筋を全く無視して、あくまでテーマ的に日本思想の学習を作り上げていくかであろう。といっても、これは二者択一の問題でもなからう。その中でどのように授業を作り上げていくかであろう。

私見ではあるが、もしこのような「基準」をつくりだすとすれば、今私は「自然」（しぜん、じねん、おのずからなる）という言葉に注目をしている。さまざまに解釈できる言葉ではあるが、少なからず日本の思想の根底にある概念ではないか。日本人の自然観とは重要なものであろうし、宗教観・道徳観とも離れて語れないものである。日本の仏教思想の中でも重要な位置を占める概念である。江戸時代にもこれに注目した思想家がいる。「自然」をキーワードに日本思想の物語を作ることができるのではないか。今ここで詳細にそれを語るには私の力不足であるので、今後の課題となっていくものであろう。

6. おわりに～世界に発信できる日本思想～

それと関連して、世界に発信し、誇ることでできる日本の思想をあげることができる。私自身が研究し、教材化してきた（現在進行形のものを含めて）ものに以下のようなものがある。

- ◎ 岡倉天心と「茶の本」
日本文化の発信～総合芸術としての茶の湯、文明批判、平和思想
- ◎ 禅と悟り～鈴木大拙
ブツダの教えを純粹に受け継ぐ禅仏教のあり方、言葉・知識によらない世界
- ◎ 侘び、寂び、幽玄
日本独特の美意識
「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」
「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや」
- ◎ 義理と人情
人間と社会における日本独特の概念、倫理観。「心中」とのつながり

いずれも日本独特の概念や思想であるが、世界にむけて紹介できるものではないかと考えている。詳細は『高等学校「倫理」における日本思想を扱った学習指導の研究 研究報告書』（財団法人上廣倫理財団主催 日本思想テーマ研究会～以下続刊の予定）に掲載し、あるいは今後掲載する予定のものである。なお、この小論もこの上廣倫理財団主催の日本思想テーマ研究会の研究から触発されておこしているものであることを記しておく。